

令和5年度
広島県瀬戸内高等学校推薦入学試験問題

国語

(50 分)

..... 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いて見ないこと。
2. 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。
3. 問題・解答用紙に落丁、乱丁、印刷不明な箇所があれば申し出ること。
4. 問題・解答用紙の指定欄の太枠内に、受験番号を忘れずに記入すること。
5. 問題・答案は試験終了後、監督員の指示によって回収するので、終了の合図までそのまま静かに着席していること。
6. 余白は自由に使って良い。

受験番号	
------	--

【一】次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「なんでもいいから何か書きなさい。」

こんなふうに言われて、なかなか書けるものではない。私はプロの文筆家ではなく、哲学などを専門にする大学教師だから、そういう原稿の注文はめったにこないが、たまに、「なんでもいいですから」と言われることもある。たいへん、困る。一般的に言って、何かを書くと、書きたいこと、書かなければいけないことがあるから、書くのである。それで、「なんでもいい」という注文をつい引き受けて、締切近くになって何か書きたいことをゴソゴソ探して、見つからず、「はあ」なんてため息ついたりすることにもなる。まったく、書きたいことがないのなら、書かなければいいのだ。

もちろん世の中には、とくに書きたいこともないままに書かれた文章①というものもたくさんある。ひとつは、ただひたすら原稿料をいただくために書かれた場合である。気軽に読める文章の多くがそういうものであったりするので、読者はへたをするとその手の文章を見本にしてしまうということにもなる。しかし、書きたいこともないのに一定枚数を埋めるというのは、プロにのみ可能な、きわめて□な技術であるから、素人諸氏※1（私も含めて）は、よろしくまねなどしないように願いたい。

もうひとつは、芸術である。芸術的表現の場合には、書きたいことが明確でない場合もしばしばであり、むしろ、書くことによってはじめて、自分が何を表現しようとしているのが形になってくる。ときには、読者の深読みによってようやく、著者の意図aが姿を現わすということも起こる。これはこれで果てしなく難しい技ではあるが、止むに止まれぬ表現への衝動はプロとアマを問わないものであるから、どうぞご自由に研鑽※2を積んでいただきたい。

というわけで、何か書きたいことがあるとしよう。ここで私が問題にすることは、自分が書きたいと思っていることをいかに伝えるか、である。これもなるほど、難しい。《 》、いかに原稿料を稼ぐかとか、いかに芸術するかという問題に比べれば、ずっとアプローチしやすい問題と言える。一介の大学教師がしゃしゃり出るゆえんである。

さて、書きたいことがある、伝えたいことがある、それをいかに書いていくか、考えなければならぬ。しかし、いささか逆説※3的な言い方をすれば、たしかに「書きたいこと」が書き始める出発点ではあるのだが、実は、いったんそこから一歩退かねば、書き始めることはできないのだ。(一)

ここで少し考えてみていただきたい。あなたは次のようなことばをどのようなときに発するだろうか。

「冷蔵庫にウーロン茶のペットボトルがある。」

ひとつのヒョウジュン^b的な場面は、自宅にいて「何か飲み物ない？」と家族か誰かに尋ねられたときだろう。それならまったく自然な返事である。しかし、これをたとえば、会社でいきなり発言したとする。書類をポンと机に置いて、ふと隣の同僚に向かって「うちのね、冷蔵庫に、ウーロン茶のペットボトルが入ってるんだ」と言うのである。

「なんだ、そりゃ」

「いや、だからさ、ウーロン茶が入ってるんだ。冷蔵庫に」

へたをすればあなたは職を失うかもしれない。

あるいは、通りすがりの人に向かっていきなり話しかける。「うちの冷蔵庫に……」、逃げられるだろう。あたりまえである。しかし、^②ここに、書くことの根本がある。「書くこと」とは、同時に「読んでもらうこと」なのである。いったい、誰に読んでもらいたいのか。たとえば、私がいまこうして原稿を書いているとき、私は、姿の見えない、どういう人とも分からぬ相手に向かって語りかけなければならぬ。それはかなりの程度、通りすがりの人に話しかけるに等しいことなのである。(ii)

読者の姿を見失うとき、文章は問わず語りのモノ^{*4}ログになる。そのとき、よほど幸運に恵まれているのでないかぎり、あなたはただ雑踏^{ざつとう}の中でブツブツつぶやいているだけの人になっているだろう。

そうならないためには、どうすればよいのか。

質問を相手にさせる。これが答えである (iii)

「何か飲み物ない？」という問いが発生しているかどうか。そこに、「冷蔵庫にウーロン茶がある」ということが流通するかどうかの境目がある。問いかけがあれば、相手はその答えに耳をカタム^cけ、問いかけがなければ、たとえ同じことを語ったとしても相手は逃げていく。

^③ここには、何かを伝えようとするときの、もつとも基本的な技術がある。私自身はそれを、書くことよりもむしろ教師として授業をする経験を通して学んだように思う。とくに哲学の授業というのは、まず何の役にも立たない。「他者の他者性がどこにあるか云々」などと、学生諸君にとつてはどうでもよいと思われることを話している。自分ではだいたい話と思っているのだが、へたをすれば、誰も聞いてなんかいないという悲惨^{ひさん}な状況になりかねないのである。そんなとき、学生の方から質問が出されると、ぐっとやりやすくなる。(iv) 「そんなことはない、学生につまらぬ質問をされると授業が滞^dるだけだ」という教師もいるだろう。そういう人はおそらくモノログ型

の授業をやっているのである。教室でブツブツ独白し、聴衆はただ自分ひとり。邪魔立て無用、というわけだ。

かつて、ある授業で、難しい哲学問題に私自身からなくなってしまう、しどろもどろ、冷や汗をかきながら終えたことがある。失敗した、そう思つて教室を出ようとしたそのとき、あるうことか一人の学生が、「先生、今日の授業、分かりやすかつたですね」と言つてきたのである。^⑤ここには、不特定の相手に何かを伝えようとする者が陥りがちな落とし穴がある。きちんと準備し、みごとな構成とわれながらほればれし、よどみなく授業したとする。ダメなのである。そのとき教師自身がほればれしているのは、「どう教えればよいのか」という教師自身の問題に対して、自分で合格点と思える解答を得たからにはかならない。しかし、学生はそもそも「どう教えればよいのか」なんて問題は抱えていないのである。だから、流れるように授業をしても、それが答えになるようななんらかの問いを学生たちのもとに発生させなければ、学生はただ置いてけぼりを食わされるだけでしかない。他方、かつての授業で私は、授業中に問い直し、悩み始めた。そんなつかえつつかえの進み方が、かえつてよい方向に働いたのだろう。

聞いてもらおうとするならば、たとえ大人数の授業でも、対話型の授業をめざさねばならない。まず問いを発生させる。何だろう、なぜだろう、どうなっているんだろう、そうした問いの前に学生ひとりひとりを向かわせ、答えへの要求を生み出すのである。それから言いたいことを言えば、ほら、学生はみんな目を輝かせて……、と、いうほどうまくいくわけではもちろんないが、少なくとも、問いのなるところに答えだけ言つても失敗することだけは、目に見えている。

書くことも同じである。ただ、書く場合には目の前に聴衆がいない分だけ、モノローグ型になりやすい。読者に問いを発生させることなく、ひたすら自分の言いたいことを書いてしまいがちなのである。だから、何かを主張したければ、「これはいつたいどういう問いへの答えになっているのか」と自問するところから始めなければならぬ。^⑥「書きたいことから一歩退いたところから始めよ」と先に述べたのは、そういうことなのである。

(野矢 茂樹著 『哲学な日々』を一部改題)

- ※1 諸氏 | 多くの人々に対する敬称。みなさん。
- ※2 研鑽 | 学問などを深く究めること。
- ※3 逆説的 | 普通とは反対の方向から考えを進めるさま。
- ※4 モノローグ | 演劇で、登場人物が相手なしにひとりて言うせりふ。独白。

問一 { } a ~ d のカタカナを漢字に、漢字は読みをひらがなにそれぞれ直して書きなさい。

問二 □にあてはまる語として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 粗末 イ 異様 ウ 高度 エ 単純

問三 《 》にあてはまる語として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア また イ したがって ウ つまり エ しかし

問四 次の一文を補うのに最も適当な箇所を文章中の(i)～(iv)の中から選び、その記号を書きなさい。

しかも、あなたの言いたいことがその答えになるような、そういう質問を相手から引き出さねばならない。

問五 — ①「書きたいこともないままに書かれた文章」とありますが、これは具体的にどのような場合に書かれた文章を指しますか。

一つは二十三字で、もう一つは八字で、文章中からそれぞれ抜き出して書きなさい。

問六 — ②「ここに、書くことの根本がある」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の

ア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 文章を書くということは、通りすがりの人に話しかける行為と同じように、読者に好印象を抱かせる工夫をしたほうがよいということ。

イ 文章を書くということは、通りすがりの人に話しかける行為と同じように、どのような人物かわからない相手へ伝えるようにしなければならないということ。

ウ 文章を書くということは、通りすがりの人に話しかける行為と同じように、見ず知らずの読者に語りかける気軽さが必要であるということ。

エ 文章を書くということは、通りすがりの人に話しかける行為と同じように、読者に興味を抱かせる技術を身につけなければならないということ。

問七 — ③「何かを伝えようとするときの、もつとも基本的な技術」とありますが、具体的にどうすることですか。解答欄に合わせて、文章中から九字で抜き出して書きなさい。

問八 — ④「冷や汗をかきながら」とありますが、この慣用句が使われている正しい表現として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 試験に合格して冷や汗をかいた。

イ 炎天下の中で走って冷や汗をかいた。

ウ 締切に遅れそうになって冷や汗をかいた。

エ 抽選に外れてしまつて冷や汗をかいた。

問九

——⑤「ここには、不特定の相手に何かを伝えようとする者が陥りがちな落とし穴がある。」とありますが、どういうことですか。それを説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 教師は学生と一緒に答えを考えるような授業をすべきであるが、学生たちの多様な発想を生み出すという行為を尊重する指導に意識が向いてしまうということ。

イ 教師は学生から問いを引き出すような授業をすべきであるが、自らがよどみのない説明を行うという行為に重点を置いた指導に意識が向いてしまうということ。

ウ 教師は学生自身が答えにたどり着くような授業をすべきであるが、正解へ導くよう問いかける行為に注視した指導に意識が向いてしまうということ。

エ 教師は学生が関心を向けられるような授業をすべきであるが、学生同士が議論をするという行為を主体とした指導に意識が向いてしまうということ。

問十

——⑥「『書きたいところから一步退いたところから始めよ』と先に述べたのは、そういうことなのである。」とありますが、筆者がこのように述べるのはどのようなことが起こると考えるからですか。その内容が述べられている一文を文章中から五十字以内で抜き出して、最初と最後の五字を書きなさい。

問十一

次の文章は、本文の後に続きます。□の中に入る語句を後のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

(お気づきだろうか、私自身ここで、□という技術を少しだけ用いたことになる。「一步退いたところから始める」なんていささか分かりにくい言い方をしておいて、読者に「どういうことかな」と思わせたかったのである。それからおもむろに「どういうことかと言えばですね」と切り出す。うまくいったかどうかは心もとないけれど。まあ、それなりに工夫して原稿を書いているのです。)

ア 問いを発生させる

イ 悩みながら書き進める

ウ いきなり話しかける

エ モノローグ型にする

【二】次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

高校生のヨウスケは、折り紙が好きなハルカという女の子と出会う。彼女は父親から学んだことを紙ヒコーキに記し、ヨウスケに教えていく。

「あらゆる欠点を魅力に変える光……」

僕は口に出して読んだ。

「小学生のときの夏休みの工作の宿題で、私、ログハウスを作ろうって思ったの。折り紙を筒状に丸めたものを一本ずつ丸太にして」

「へえ、いいアイデアだね」

ハルカの折り紙好きは今に始まったわけではなさそうだ。

「ところが、作っていくうちにどんどん汚くなっていくの。ただ丸太として丸めたときはきれいな円柱形になったんだけど、そのあと、長さ^aをハカってハサミで切ったり、窓用にくりぬいたり、のりで貼ったり、セロテープで補強したりとやっていくうちに、だんだんしわだらけのクシャクシャになってしまっ^aて。ようやくできあがったときには、あまりにひどい見た目で、『これじゃあ、学校に持っていけない』って泣き出しちゃったの」

「わかるよ、その気持ち。僕もマツチ棒で家を作ったことがあるんだけど、隙間だらけで上手に作れなかった」

「そのときに、パパが話してくれたの。パパは模型が好きで、昔からよく西洋の古城とかを作っていたんですって。ところが、とても難しく、どうしても隙間ができてしまったり、汚れてしまったりして、とにかく完璧に美しく仕上げるのは**至難の業**^bらしいのよ」

「で、その失敗を目立たなくする方法を見つけた？」

「ううん、違うの。残念ながら、失敗した隙間や汚れは、隠そうとしても隠しきることはできないの。それどころか、下手に**小細工**^cしようとする^②と、かえって余計にあらが目立つっちゃう」

「確かに、言われてみればそのとおりだ」

「でね、隠そうとするんじゃないなくて、活かそうとするって決めたんだって。それがその作品にとってなくてはならないものにしちゃうってわけ」

「いったい、どうやって？」と、僕は視線で尋ねた。

ハルカは一瞬微笑み、そしてゆっくり言った。

「中に明かりを入れるの」

「中に明かりを？」

「そうよ。そうすると、その隙間は作品の欠点ではなく個性になるの。どんなにたくさん失敗によってできた隙間や傷があっても、そこから漏れる明かりのすべてが、その作品を美しく引き立たせる個性になる。内側に明かりを灯すことによってね」

④ 僕は瞬間的に納得させられてしまった。確かにそうすればどんな作品も個性的な素晴らしいものになるだろう。

⑤ 「そして、人間も……」

「そう！ 人間は完璧じゃないってよく言われるけれども、パパは一人ひとりがそのまま唯一の素晴らしい存在だっていつも言っているわ。ところが多くの人は人と違うという理由だけで見た目にコンプレックスを抱いたり、**I** 的に傷を抱えているせいで自分は価値のない人間だと思ったりしている。(i)

でも自分の内側に明かりを灯すだけで、それらすべてのコンプレックスや、今日の自分をつくり上げるためにできた傷は、その人の魅力を引き出す個性になるの」

「なるほど！ ……でもどうやって自分の中に明かりを灯したらいいんだろう」

「イメージするだけでいいのよ。心の中に光があるってイメージするだけで。**II** 力は人間の持つ大きな武器なのよ」

「えええ？ イメージするだけで？」

「そうよ。私はいつもこんなふうに考えるの。私の中にはね、小さな炎のカタマリの^dようなものがあるの。小さな太陽みたいなものがあるってイメージするの。そしてそれがどれだけ大きくて、明るいかなって考えるの。私の外に漏れて、私を見ている人が眩^{まぶ}しいと感ずるくらい大きいかな、明るいかなって。どう？ ヨウスケ君もやってみて」

「あ、ああ……」

言われるままに、僕は自分の中に明かりが灯っている様子をイメージしてみた。(ii) とてもじゃないが、僕の外に明かりが漏れそうなものではない。

「それならね、それをどんどん大きくしていくの。誰よりも大きく、明るく、強くって思いながら、心の中にあるその光をどんどん大きくしていくの。それこそ、太陽のように大きく」⁶

僕は言われるままにやってみた。心の中でもっと強く、もっと明るく、もっと大きくと繰り返しながら、自分の想像の明かりを大きくしていった。

すると、どうだろう。(iii) 特別に何かしたわけでもないのに、なんだか自分がなんでもできる人間になったような気がしてきたのだ。^{※2} 澁刺^{はつらつ}とした明るさと他人に対する優しさのようなものも沸々^{ふつふつ}と湧いてくる。まるで、今までの自分とは違う自分になったようだ。僕は、もっと強くイメージしてみた。

(もっと明るく！ もっと強く！ 僕のすべての毛穴から外に光が漏れるくらいに！)

「そう！ そうやってやるの！ すごく変わったでしょ」

僕は我に返ってハルカのほうを見た。(iv)

「わかるの？」

「わかるわよ。これをやっている人って本当に見た目も違って、別人のように見えるもの。実際に光が出ているように見えるのよ」^⑦
僕は素直に驚いた。そして勇気づけられた。

「これ、すごいね。なんだか自分にすごく自信が持てるというか、なんでもできる人になれた気がするというか……とにかく、これが同じ自分か？ って思うほど力が湧いてきたよ。見た目に対するコンプレックスとかも自分の個性だって、本当に思えるよ」^⑧

「そう思ってくれるとうれしい。私もね、人と話しているときとか、何かをしようとするときとか、ふと自分に自信がなくなりそうなきには、いつも思い出すようにしているの。『いつでも心の中に煌々^{※3}と明かりを灯していれば、お前の持っている心の傷や人と違う部分、目や口などから明かりが漏れて、とても素晴らしい魅力のある人間になれるんだよ』っていうパパの言葉を」

——今の自分の中には、外に漏れるくらい明るい光が煌々と燃えているか。

それは、その日以来、僕がことあるごとに自分に問いかける言葉となった。

(喜多川泰著 『君と会えたから……』より)

※1 ログハウス | 一般的に丸太を積み重ねた壁によって構成される建物。

※2 澁刺 | 動作や表情などが生き生きとして、元気にあふれているさま。

※3 煌々 | きらきらと光っているさま。

問一 ｛ ｝ a ｝ d のカタカナは漢字に、漢字は読みをひらがなに直してそれぞれ書きなさい。

問二 I にあてはまる語として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 内面 イ 多面 ウ 外面 エ 一面

問三 II にあてはまる語を文章中から二字で抜き出して書きなさい。

問四 次の一文を補うのに最も適当な箇所を文章中の (i) ～ (iv) の中から選び、その記号を書きなさい。

心の中に浮かんできたのは、恥ずかしながら、風が吹いたら消えてしまいそうな小さなロウソクの炎のような光だった。

問五 ① 「『これじゃあ、学校に持っていけない』って泣き出しちゃったの」とありますが、なぜハルカは泣き出したのだと考えられますか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 折り紙で作ったログハウスは強度が低く、できあがったときには崩れかけていたから。

イ ログハウスを作るうちに折り紙の丸太がだんだんとしわだらけになり、ひどい見た目になったから。

ウ 折り紙を丸めて作った丸太ではきれいな円柱形にならず、上手に作れなかったから。

エ ログハウスの窓を作るためにハサミでくりぬいた結果、隙間だらけになってしまったから。

問六 ② 「その失敗を目立たなくする方法」とありますが、どのようにすることだとハルカは言っていますか。文章中から十一字で抜き出して書きなさい。

—— ③ 「それ」は何を指しますか。文章中から九字で抜き出して書きなさい。

問七 ④ 「僕は瞬間的に納得させられてしまった。」とありますが、なぜヨウスケは納得させられてしまったのだと考えられますか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 中に明かりを入れることで完璧なものとなり、欠点のない作品として展示できるから。

イ 内側から漏れる美しい明かりで、作品の欠点が隠れるくらい素晴らしいものになるから。

ウ 失敗による隙間や傷は光によって活かされることで、作品がより魅力的なものになるから。

エ 隙間や傷を隠すために内側から明かりを灯すことで、より個性的な作品ができあがるから。

問九 ⑤ 「そして、人間も……」の後に省略されていると考えられる語句として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 内側から出る光によって周囲より目立つことができる。

イ 内側から出る光によって個性や魅力を引き出すことができる。

ウ 内側から出る光によって個性を完璧に作り上げることができる。

エ 内側から出る光によってコンプレックスを隠しきることができる。

問十 ——— ⑥「太陽のように」とありますが、ここで使われている表現技法として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 隠喩 イ 擬人法 ウ 直喩 エ 倒置法

問十一 ——— ⑦「僕は素直に驚いた。そして勇気づけられた。」とありますが、なぜヨウスケはそんな感情を抱いたのだと考えられますか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 今までと異なる自分になれたと実感し、ハルカにも認めてもらうことによって嫌な思い出を忘れられたから。

イ 心の中の光が太陽のように大きくなったことで、ハルカと同じようなイメージする力が身に付いて前向きになれたから。

ウ 人と違う部分があることにコンプレックスを抱いていたが、理想とする姿になれたことをハルカと分かち合えたから。

エ 今までと違う自分になれたように感じ、ハルカもその変化に気づいてくれたことで自信を持てるようになったから。

問十二 ——— ⑧「見た目に対するコンプレックスとかも自分の個性だって、本当に思えるよ」とありますが、どうすることで自分の個性だと思えるのですか。解答欄に合わせて、文章中から十六字で抜き出して書きなさい。

【三】 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

これも今は昔、ある僧、人のもとへ行きけり。酒などすすめけるに、氷魚はじめて出できたりければ、あるじ、めつらしく思ひて、
(鮎の稚魚) (手に入る)

もてなしけり。あるじ、よようの事ありて、内へ入て、又、出でたりけるに、この氷魚の、ことのほかにすくなく成たりければ、ある

じ、いかにも思へども、いふべきやうもなかりければ、物がたりしあたりける程に、この僧の鼻より氷魚の一、ふと出でたりければ、
(突然出てきたので)

あるじ、あやしうおぼえて、「その御鼻より氷魚の出たるは、いかなる事にか」といひければ、とりもあへず、「この比の□は目鼻
(この頃の)

より降り候なるぞ」といひたりければ、人みな、「は」とわらひけり。
(降るものだそうだと)

〔『宇治拾遺物語』より〕

問一 　　～ a ～ c の読みをそれぞれ現代かなづかいで書きなさい。

問二 　□にあてはまる語を文章中から二字で抜き出して書きなさい。

問三 　　―― ①「この氷魚の、ことのほかにすくなく成たりければ」とありますが、なぜだと考えられますか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 氷魚が暑さのために溶けて消えてしまったから。

イ 氷魚が器から勢いよく飛び出してしまったから。

ウ 僧が器の中にいた氷魚を盗み食いしてしまったから。

エ 僧が氷魚と他の種類の魚を混ぜてしまったから。

問四 　　―― ②「あやしうおぼえて」とありますが、あるじは何をあやしいと思ったのですか。文章中から適当な箇所を二十一字で抜き出して、最初の五字と最後の五字を書きなさい。

問五

——③「人みな、『は』とわらひけり」とありますが、人々はどのような気持ちから笑ったのですか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 僧の鼻から氷魚が飛び出た様子がほほえましかったから。

イ 僧の考えた言い訳が巧みで感動したから。

ウ とっさに考えた僧の言い逃れがおかしかったから。

エ 言い訳に失敗した僧の気まずさに同情したから。